

NIHON-KENKYU

No.36 SEPTEMBER, 2007

INTERNATIONAL
RESEARCH CENTER
FOR
JAPANESE STUDIES

KADOKAWA GAKUGEI SHUPPAN

essay by Feng that portrays his professor of music during his stay in Japan. The main subject of *Lin Xiansheng* is the same as those of the works by Lu Xun and Soseki. Because of the use of poetic, pictural expressions, and the motif of music, *Lin Xiansheng* is a very artistic work.

In comparison with *Professor Craig*, Feng also used the technique of repetition, humorous exaggeration, and poetic phrases. Moreover, the manner of describing the main character is similar. *Lin Xiansheng* and *Tengye Xiansheng* share common motifs — in both works, a note book indicates heart-warming communication with their professors. These two Chinese writers, both build up an image of 'teacher' within Confucian culture. They attached importance to the ties between the student and the professor. For Sōseki, Professor Craig was not a good teacher from this point of view. Nevertheless, at parting Sōseki was impressed by the attitude of Craig for the first time. Moreover, in his work Sōseki praised this unworldly teacher with a humorous touch. The hermit-like aspect of Soseki's depiction of Craig is common to that displayed in Feng's *Lin Xiansheng*.

Through comparison, we recognized also the distinctive feature of each essay. *Professor Craig* is a humorous work, containing a poetic charm. In *Tengye Xiansheng*, we can see not only an ideal image of a teacher from the view of a Chinese student, but also the author himself as a student in Japan and a combative writer in China. Borrowing characteristics from these two works, Feng created *Lin Xiansheng* as a pictural, musical, and poetic essay.

**A Study of Ideals of Non-Violence, Self-Sacrifice and
Vegetarianism in Miyazawa Kenji's Works:
From an Indian Point of View**

Pullattu Abraham GEORGE

*(Jawaharlal Nehru University, New Delhi, India / Visiting Scholar,
International Research Center for Japanese Studies, Kyoto, Japan)*

Key Words: NON-VIOLENCE, NON-RESISTANCE, IDEAL OF SELF SACRIFICE, COMPASSION, VEGETERIANISM, CYCLE OF REBIRTH, KARMA, VISION OF THE UNIVERSE, HOKKEKYO, INSPIRATION, SUPERHUMAN POWER, ATTACHMENT, FEELING, CONCERT OF DEFILEMENT, JAINISM, BUDDHISM, HINDUISM, LAWS OF MANU, THIRUKURAL, EVERYBODY'S HAPPINESS, COEXISTENCE AND COPROSPERITY

It is often said that there is no Iwate Prefecture or Japan in Miyazawa Kenji's literary works, but only the Universe. The universality of his vision of the world, life and religion manifested in his works is the standing testimony to this statement. No doubt, his exceptional imaginative power and great sensibility, which crossed to a supernatural level beyond the receptive mind of a common man, had given birth to several outstanding works hitherto unheard in the history of Japanese literature. This paper tries to dig up and interpret, from Indian point of view, the Buddhist and Indian thought of Miyazawa Kenji—his ideals of compassion towards living beings, non-violence, self-sacrifice, vegetarianism and his notion on rebirth—as manifested in some of his prose works.

His family environment, the inspiration he received from various religious teachings, espe-

When considering scholarship on Islamic thought in Japan, there is no doubt that Izutsu Toshiko's work far exceeds all other researches. It would not be an exaggeration to say that the understanding of the Islamic world by Japanese intellectuals is almost entirely through his writings. Peculiarity of Izutsu's writings can be said as that of Japanese intellectuals' understanding of Islam. At the start of this paper, it is pointed out that Izutsu put almost exclusive emphasis on Sufism and Islamic philosophy, giving only a passing reference to Islamic Law, or Fiqh. Then, this paper tries to demonstrate that his exclusive concern with mystical and philosophical aspect of Islamic intellectual history derives from his upbringing characterized by mystical discipline given by his Zen-oriented father. Descriptions of his young days dispersed in his

Key Words: HISTORY OF ISLAMIC THOUGHT, IZUTSU TOSHIIKO, MYSTICISM, SUFISM, PHILOSOPHY, ZEN

(International Research Center for Japanese Studies, Kyoto, Japan)

IKEUCHI Satoshi

The Japanese Understanding of Islam as Seen in the Writings of Izutsu Toshiko

Has Japan changed over from a stem-family society to a nuclear-family society since the World War II? Focusing on a traditional nuclear-family society, England, and reexamining the fundamental characteristics of a nuclear-family society, we will grasp a position of the present Japanese family. Based on family history in England which has accumulated a great store of knowledge, we will propose a new clue for understanding the present Japanese family. Kin relations between parent(s) and child(ren), regardless of residence, are important in this paper.

TIVE STUDIES

Key Words: JAPAN, ENGLAND, KIN RELATIONS, NUCLEAR FAMILY, STEM FAMILY, FAMILY CHANGE, COMPARATIVE

(Independent scholar)

HIRAI Shoko

Kin Relations in a Nuclear-family Society, England and a Stem-family Society, Japan: A Note for a Comparative Research

cially from the Hokkekyo, the enlightening knowledge he obtained from his school education and his meticulous observation of the nature, his compassion and sympathy towards the poor and downtrodden farmers around his home town, are some of the major external factors which helped developing his thought and personality. The first part of this paper discusses these external factors briefly. Next, the ideals of non-violence, compassion and the notion of self sacrifice are discussed, mainly based on "Yodaka no hoshi." Finally, Kenji's vegetarianism based on Buddhist and Indian ideals, as manifested in his work "Bijiterian taisai", is discussed in comparison with the vegetarianism practiced in India.

SUMMARY

宮沢賢治の作品に見られる「非暴力主義」「自己犠牲の精神」と「菜食主義」の一考察

——インド人の観点から

プラット・アブラハム・ジョージ

はじめに

宮沢賢治の童話作品のどれを見ても、ある種の神秘的な自然観にあふれ、賢治独自の人生観、世界観及び宗教観の色彩に富んでいる。詩人や作家は誰でも普通と違う想像力を持ち、独創的な創造力の持ち主であることには相違ないが、賢治の想像力は超自然的で、一般人の認識と感受性を超えた領域にある。

彼のイメージーションの深さ、そして感受性の鋭さは超能力者にしか見られない、神性に近いものである。一度も見たことのない、または立ち会って経験したこともない事柄や自然現象の描写に当たっても、賢治はまるで目の前で今見ながら描いているような多元描写で自然現象を表現する。彼の生まれつきの能力は神性に近いものとさえいえる。日本から何千キロも離れていて、日本では絶対観察

できない空模様や地形図を、正確に、しかも読者を納得させるように描写するところにも賢治の人並みならぬ、超自然的な能力が顕現しているといえる。彼はこれらの自然現象や事柄を自分の心の目と肉体の目で見ていたのではないか。詩人原子朗が「賢治という人はただの文学者天才ではなく、なまじインドや南十字星を見た者よりカラダごと深くそれらを「観て」いたのかもしれない」と指摘しているように、彼は心だけでなく体をも想像世界へ持って行って物事を「観て」いたに違いない。彼の物事を観察する鋭い眼差しは、自然現象の奥義を貫き、そこに潜んでいる「神秘性」を見つけ出す力を持つていた。それは普通の人の常識を超えた領域を観察できる優れた視覚的・聴覚的頭脳の持ち主でなければなかなか持ち得ないものである。

彼のものの見方と考え方、宇宙観とビジョンは、同時代の文壇に

普通と違う、別世界の人間のような人生を送ろうとする。

私たち人間は考える動物だといわれるが、やはり動物だから人間も動物的な本能の奴隷で、自分の利益ばかり考えてしまうのがごく自然のことである。しかし、一瞬の出来事で気が変わって、人のために一生を使い尽くそうと決心する人も少なくはない。マハートマ・ガンジーもマーチン・ルーサー・キングもマザー・テレザも、また宮沢賢治も、そのような人間ではなかったのか。各々の歩んだ道や取った手段及び活動の規模はそれぞれ異なっていたが、彼らは皆社会の福祉、人類の平等と人権に基づく総合的な成長を目指す共通の目的を持っていたのではないか。

宮沢賢治の人格を形成し、彼の人生の方向性を回転させて、最終的に自己を犠牲にしても他人の苦悩をなくさなければならぬという理念に彼の考え方を定着させた外力には、いくつかのものがあつた。

仏教徒の家に生まれ育つた彼は幼い時期から心に生き物に対する慈悲と同情の念を抱えていた。小学校で先生に読んで聞かされた童話や民話は彼の幼い心に好奇心と想像力の種を蒔いた。それに、クリスチャンだった担任の先生や、花巻や盛岡で活躍していたクリスト教宣教師の感化でクリスト教的な世界観にも子供のときから触れることができた。少年期に心に蒔いておいた好奇心と想像力の種は思春期になると芽を出し始めた。そして、山や谷、川や森を彷徨し、

自然の神秘と真理の追求を行うと共に、彼独特の人生観及び世界観を形成しながら大人へと成長していった。執着は人間の人生をいかに苦しめるかという真実に気がつき、執着から脱出できればすべての苦悩や煩惱からの解放が可能であるという仏教の教えに導かれていたと言ったほうがもつと適当であるかもしれない。自分の周りで貧困にあえいでいる貧民の苦悩の原因も、執着に起因するものだというふうに見取っていたに違いない。執着さえなければ、煩惱や輪廻転生から脱出でき、菩薩の道に入れるのだが普通の人にはなかなかそれができない。そこで、その身代わりとして、賢治は修行の道を選び、性欲を抑制するとともに結婚を差し控えて、無執着の道を選んだのではないか。

人のために一生を尽くすこと、または人に仕えるための労力を惜しまないということは皆にできることではない。しかしそれができる人は他と違う想像力と超人的能力の持ち主となり、独特のビジョンと世界観を作り出す人間になる。そして「デクノボー」になって人に仕えることが、彼らの人生の唯一の目的となる。賢治もおそらくそれを望んでいたであろう。「賢治という人間は風とともに誕生し、光のような風の波に乗ってこの世を去っていった。賢治の詩も童話も、その本来のあり方においては風が吹いて話が始まり、風が吹いて終息に向かう」と山折哲雄が指摘している。彼の体内にも一つの風が絶え間なく吹いていたと思う。それは決して嵐に変わ

なものだと自負してゐますが、思想の根底はすべて先生の童話から貰つたやうに思つて感謝してゐます」と賢治が後に汽車の中で、八木先生に偶然会つたとき、感謝を述べている。⁽¹⁹⁾つまり、賢治にとつては八木先生に読んで聞かされた童話や民話は、子供時代の自分にとって大きな刺激を与えてくれた主な外力の一つだった。それは、彼をただ夢の世界へ連れていってくれただけではなく、宇宙や自然現象に対する好奇心を生み出す原動力となつて、心の奥の奥へ、動物と人間の区別さえつかないすばらしい想像の世界への扉を開けてくれたのである。そして、後にその扉の開け口からほとぼしつてきたものが童話となり詩となつて現れた。

また、小学校時代の賢治は父の質・古着商を誇りに思つていただけではなく、家の長男として家業を受け継ぐ考えさえ持つていた。賢治は小学校四年生のとき書いた「立志」という課題作文の中で「お父さんの後をついで、立ばな質屋の商人になります」と書いた⁽²⁰⁾。職業名からもわかるように、質屋の商売とは貧しい人々の持ち物や着物などを質に置いて彼らに高い利子のお金を貸し出すことである。貧困にあえぐ農民たちにとっては、自分の持ち物を質にして借りた金どころかその利子さえ返済できない場合が多い。結局、質屋がそれらの物の所有権を譲られ、それらを売つて得るお金で益々裕福に発展していくわけである。幼い賢治には質屋の商売に隠れているからくりがおそらくわからなかつただろう。それで家

業を賞賛して作文を書いたのだと思う。しかし、まもなく賢治が家業のことを嫌うようになり、他人の不幸を利用して栄えた自分の家を蛭や蠍にたとえて非難することになるのだが、その主な理由は第一の外力である仏教の教えであると思われる。

賢治の父宮沢政次郎は質・古着商を営んでいたにもかかわらず、浄土真宗の熱心な信者として深い信仰と宗教心の持ち主でもあった。彼は浄土真宗の教えに忠実に従い、さまざまな人道的な活動を行つていただけに仏の教えに逆らう行動をするはずはなかつた。「自分は仏教を知らなかつたら三井、三菱くらいの財産は作れただろう」と後に回想させしている彼の本音を疑うわけにはいかない。彼は毎年夏に有名な仏教学者を花巻に招待して合宿講演会を開いていた。招かれた講師には、近角常観、多田鼎、暁鳥敏などがいたが、中でも暁鳥敏が何回も招待されて花巻に来ていた。「暁鳥敏は日本の宗教界にひじょうに大きな足跡を残した宗教家で、浄土真宗の大谷派に属していました。(中略) 宮沢家は、その暁鳥敏を毎年のように花巻の地に招いて講習会を開いています。当時、宮沢賢治は小学生でしたが、暁鳥敏が花巻にやってくると、その身の回りの世話をやらされていた。食事の世話、お風呂の世話、床の上げ下げなど、全部賢治の仕事でした。暁鳥が仏教講話をするときは、必ず末席にひかえ、膝をそろえて座つて聞いていたという」と山折哲雄も「デクノボーになりたい 私の宮沢賢治」の中で書いておられる⁽²¹⁾。

の葛藤を少しでも和らげるために岩手山に何回も登ったりしていた。鉱物採集や詩作取材のために岩手山によく登ったり、野山を散策したりしていたのではないかとこの見解が学者の中でも主流であるが、そのみが目的であったのか疑問に思う。岩手山に数十回も登ったということ自体は、これらよりも何か重要なものを探し求めていたことを示唆しているのではなからうか。山や森は葛藤している人の心に安らぎをもたらす役割を果たす一方、想像力と創造性を培ってくれるところでもある。頻りに山に登ったことの裏には想像力を育み、イマジネーションを培う目的もきつとあったと思うが、同時に彼は一種の修行として山に登っていたのに違いない。すべての人類が平等になり、幸せになってもらいたいという彼独特の正義感に基づき絶対的な真理を求めて行っていた修行に他ならなかった。そして最後に、彼は、人間を含むすべての生き物にはこの地球上に平等に住む権利があるという絶対的な真理を、諸作品を通して肯定したのである。

賢治の人生に最大の影響を与えた外力は「法華経」の教えだといわれる。彼は一八歳のとき島地大等編の『漢和対照妙法蓮華経』を讀んで大きな感銘をうけた。釈迦の晩年に説かれた教えの極意と位置づけられている法華経は、一切の衆生がいつかは必ず「仏」になり得ると教えている。「……お前たちが一切知者の知と、勝利者の徳である十力を獲得するときは、三十二の相あるすがたを有する仏

陀となつて（真の）涅槃を得るであらう」つまり、法華経はすべての衆生を平等に見ているだけではなく、その奥義を聴いてその教えを信じようとするどの人でも必ず成仏することを保証している。しかも、人類のすべての苦悩や病からの解放をも保証している。法華経のどういう教えが彼に大きな影響を与えたか明確ではないが、賢治の羅須地人協会以降の行動から推測すれば、次のようなところに一番感動したのではないかと思う。

「また、宿王華よ、この『正しい教えの白蓮』という法門は、あらゆる衆生たちをすべての恐怖から救うものであり、すべての苦しみから解放するものである。喉が渴いた人々にとっての池のように、寒さに苦しめられる人々にとっての火のように、裸者たちにとっての衣服のように、商人たちにとっての隊商の長のように、子供たちにとつての母親のように、対岸に渡ろうとする人々にとつての舟のように、病人たちにとつての医者のように、暗黒に閉ざされた人々にとつての灯火のように、財産を求める人々にとつての宝玉のように、あらゆる城主たちにとつての転輪王のように、河川にとつての海のように、すべての暗黒を破るための松明のように、宿王華よ、ちよどそのように、この『正しい教えの白蓮』という法門は、すべての苦しみから解放するものであり、すべての病いを根絶するものであり、すべての輪廻の恐怖と束縛との狭く険しい道から解放するものである」。

として、そして百姓として休まず勤めたのである。

インド・東洋的な考えでは、人類の総合的成長を目指して同時に行う精神的な追求と科学的な探究は、決して相反するものではない。かえって互いに互いの属性となるものである。それに、家族や社会に対する義務を果たすこと自体は一種の精神的修養である。インドの聖典ギーターの教えによると、他人の悲しみを自分自身の悲しみとみなす人こそ本当のヨーギー（行者）である。この世に住みながら何の執着もなく人のために仕事をするということはヨーギーにしかできない。「ヨーガと合一した人は、自分自身を、すべての生き物の中に見、すべての生き物を、自分自身の中に見る。そのために、彼は世界のあらゆるものを平等に見ている」⁽²³⁾。賢治は一人のヨーギーであった。彼はすべての生き物を平等に見ていた。「みんなの為に思ふならば先づ自分を完成しなければなりません」⁽²⁴⁾と考えた賢治は自分自身をまず完成するための手段として法華経に頼ったのである。皆のためを思うなら、皆と一緒にって共通の目的、つまりみんなの経済的發展と幸福のために努力せざるを得ない。家業を引き継いで商売をしていると自分の人生が益々裕福になっていくに相違ないが、商売は偽りであり、搾取であり、皆の幸福を希う良心の間には似合わないものである。彼の生前の行動だけではなく、彼の童話作品や詩歌を買っている「自己犠牲の精神」「みんなの幸せは個人の幸せである」などの思想もその証である。

宮沢賢治の思考や行動に大きな影響を与えた外力にはまたキリスト教もあると思われる。小学生の時代から何らかの形でキリスト教的な世界観や価値観に触れるチャンスがあったに違いない。小学校五年生のときの担任であった照井真臣乳先生はクリスチャンであった。また、前述のとおり西洋の童話や民話をいろいろ読んでいた。

これらの童話や文学作品に反映されているキリスト教的思想、倫理、価値観の世界などに幼い賢治が気づかないはずはない。また、中学校時代には学校で英語を教えていたヘンリー・タピング牧師に感化され、「そのおかげで英語の能力を発揮していたように、それが機縁になって、バプテスト派の教会に通うようになりま

⁽²⁵⁾
た、当時盛岡のカトリック教会に来ていたフランス人の宣教師ブジー神父とも、良い関係を持っていた。さらに、中学校時代に寄宿生活をしていたが、当時の同室者であった高橋秀松という学生もキリスト教徒だった⁽²⁶⁾。それに、花巻出身で、明治大正時代の日本キリスト教徒の象徴ともいえる内村鑑三の弟子であった斎藤宗次郎との関係も最近、宗次郎の日記の研究で明確になっている。要するに、信心深い仏教信者であった賢治は、同時にキリスト教の教えについてもかなり知識を持っていた。「銀河鉄道の夜」を始めいくつかの童話作品もそれを裏付けてくれる証拠である。

賢治の短い一生を分析してみると、三つの賢治像が浮かび上がってくる。まずは、宗教の精神に根強くこだわる賢治である。彼のす

「不殺生」及び「菜食主義」概念の関連性はどんなものであるのか、いくつかの作品を中心に探ってみたいと思う。

賢治の「非暴力主義」と「自己犠牲の精神」

信心深い仏教徒で慈悲を自分の活動の指針にしていた賢治は、生き物すべてが共存共栄できる平和的な社会が理想的であると常に考えていた。つまり自分の利益のために相手に暴力を振るったり、強制的に相手を服従させたりしてはいけないし、相手に対して差別的な行動を強行するのも好ましくない。しかし、弱肉強食主義がはびこっている現実社会においては、自分の理想とする社会がただのユートピアにすぎないということも十分にわかっていた。にもかかわらず、彼は自分の思想を死ぬまで手放さなかった。この非暴力の概念は、実はインドのどの宗教にもみられるもので、生き物に対する慈悲、輪廻転生、因果関係（カルマの哲学）などに深い関係を持っている。恐ろしい凶器を持って自分に襲い掛かってくる敵に武器一つも持たずに、戦って勝てるものか、受動的な態度はかえって自滅に終わるのではないか、と疑問に思う人もいるだろう。実は、非暴力は精神的に強い人の使う武器である。そして、賢治の作品の中には非暴力・不服従の概念が貫かれている。たとえば、「よだかの星」という童話の主人公であるよだかは、完全に非暴力主義を武器とする精神的に強い鳥である。平たいくち

ばしと弱い足を持つているよだかは、肉体の面からいうと非常に力のない醜い鳥である。しかし、他の鳥たちに軽蔑されているにもかかわらず、彼は平和的共存を重んじ、みんなの幸福を心から願う、思いやりの深い鳥だった。鳥社会の王ともいえる「鷹」はこういう彼によく嫌がらせをしていただけではなく、改名をさえ命じた。それは、自分の名前がよだかの名前の一部をなしていることを絶対許せないからである。よだかにとっては、それは意外な命令であったが、彼は少しも怖がらないで、「鷹さん。それはあんまり無理です。私の名前は私が勝手につけたわけではありません。神さまから下さったのです。」と答えて鷹に服従しようとしな。よだかよりはるかに強い鷹は、よだかの精神的な力に驚いたのか、改名を実施するために二日間の時間を与えて帰っていく。自分の名前は自分が好んでつけたものではなく、神様からいただいたもので、神様からいただいたものだから、勝手に変えるわけにはいかない。自分の名前を変えるより死ぬ方がいいと思うよだかは、まさに精神力の強い鳥だと思ふ。彼にとっては名前が自分のアイデンティティーの表面的な象徴で、それを確保することが、鳥としての面目を保つためには不可欠である。しかし、改名が不可能だと答えるときのよだかの言葉遣いが非常に丁寧で、相手を傷つけてはいけない、という口調で話している。つまり、彼は自分の行動だけではなく、言葉遣いにさえ「非暴力」を掲げているのである。

的な行動はできない。赤ん坊の目白が巣から落ちていたときは、助けて巣へ連れて行ってやったよだか⁽³¹⁾には、それが十分あった。

肉体的に鷹ほど腕力を持っていないよだかにとっては、恐ろしい敵を打ちのめす唯一の手段は、精神の上で相手を襲って負かすしかない。鷹の指図に素直に従って、名前を「市蔵」に変えてその改名の披露を行ったならば、鷹はとても喜んだのだろう。また、逆に一対一となって鷹と直接決闘しようとしたならば、瞬く間に恐ろしい「鷹」に自分が殺されてしまったのだろう。私はこの童話を読むたび、いつもインド独立運動の父ガンジーの無抵抗主義を思い出さずにはいられない。ガンジーの提唱した「非暴力・不服従」の思想は、大英帝国の統治からのインドの独立を可能にした。「非暴力」を武器とした戦いは、結局は相手を精神の方から襲って、打ちのめす力を持っている。自己制御ができる人、言葉と行動による相手への暴力を避けることができる人こそ、無抵抗という受動的な行動で、相手がいかなる巨人であっても倒す力を持つのである。それらのことができる人の精神の力は、実際の武器より何倍もの破壊力を持っているに違いない。一滴の血も流さず敵を降伏させるよだかは、インド人にとってはガンジーの強さのまたの姿なのである。こういうところに、よだかの強さが顕現しているのではないかと思われる。「よだかの星」は比較的よく知られている作品で、日本国内外でたくさんの研究の対象となっている作品である。一見したところ、社

会における差別、いじめなどの問題を、または弱肉強食的な現実を、取り上げて描いている物語としか見えないので、今までの諸研究も、これらの問題点を中心に進められてきたと思う。表面的な側面だけを単純に解釈してしまうと、主人公のよだかはいじめや差別の対象となる弱者・敗北者にしか見えない。しかし、前述のようにこの作家の作意はそれとは違うところにあると思う。「よだか」は決して弱者でも敗北者でもなく、強烈な自尊心を持つ、生者^{しょうじや}としての究極の誇りの具現者であって、非暴力を武器に社会にはびこる悪鬼と戦う戦士である。星になりたいという自分の目的に達するまで、休まず、諦めず、努力をし続けるよだかは、貧困にあえぐ人々の苦痛を少しでも背負ってあげようと、地質調査や肥料設計に取り掛かった賢治の面影ではないだろうか。「……よだかは俄かにのろしのやうにそらへとびあがりました。そらのなかほどへ来て、よだかはまるで鷹が熊を襲ふときするやうに、ぶるつとからだをゆすつて毛をさかだてました。それからキシキシキシキシッと高く高く叫びました。その声はまるで鷹でした。野原や林にねむつてゐたほかのとりは、みんな目をさまして、ぶるぶるふるへながら、いぶかしさうにほしそらを見あげました⁽³²⁾」。鷹よりも強くなったよだかは自分が星になるまで気を落とさないうで、高く、高く飛んで行ったのである。農学校の教職の仕事捨てて、百姓生活を送る決心をした賢治の決意も、両親、親戚及び周りの人々の意見と影響に左右されるもので

ることではない。自分が他を犠牲にしなくてもいいし、自分も他の犠牲にならずにすむ。他者から愛でられ、幸せを与える美しい星となつて青く輝いているのは、自分にとつても幸せである」と鶴田静は、星になつたよだかを、「食物連鎖」を断ち切つた鳥として、高く評価している。食物連鎖を断ち切つたことは、輪廻転生の輪から解放されたということでもある。人の幸福になるなら、自分の体が灼けてもよろしいという、自己犠牲的な考えこそ、彼を往生成仏への道へ導いたのである。そして、永遠に輝くようになったよだかの他界での生活は、この世での生活よりはるかに幸せになつてい

る。人々の幸福のために自己犠牲になつてもかまわないと思ひ、不殺生の道を辿るといふ類の話が、賢治のほかの作品にも見られる。たとえば、「銀河鉄道の夜」の中に出てくる蠍の話も、よだかと非常に似ている。いたちに見付かつて食べられそうになつた蠍が一生懸命に逃げる途中、井戸の中へ落ちてしまう。「あゝ、わたしはいままでいくつもの命をとつたかわからない、そしてその私がこんどいたちにとられやうとしたときはあんなに一生けん命にげた。それでもたうたうこんなになつてしまった。あゝなんにもあてにならない。どうしてわたしはわたしのからだをだまっていたちと呉れてやらなかつたらう」と悔い改める蠍は、自分がいたちに食べられた方がいたちが一日でも生き延びただらうと思う。そして彼は、自分の体をこの次にはみんなの幸せのために使つて下さい、と神様に願

つてい

っている。小沢俊郎は、「銀河鉄道の夜」のさそりは、生命をつきつめた所において見て全人類的な献身へと飛躍する。そこに解脱もある」と指摘し、「皆に嫌われる毒虫が」捨身することによって解脱して行く所を描いた場面は、作品の中でも「印象的で美しい場面」であると言つてい

る。つまり、他人のために自己を犠牲にしてもいいと考える蠍の、この世の煩惱を乗り越えて成仏していく姿は、美しく見えたのである。結局、その蠍もよだかと同じように、永遠に燃え続ける星となつたわけである。

また、同じ作品の主人公の一人であるカムパネルラが溺れた友人を救い上げる時に、自分自身が命を失つてしまふという無残な結末となるが、彼も人の幸福のためにいいことをしたと心得ている。銀河を走る鉄道で他界への旅をしている彼は、自分のお母さんがきつと悲しくなつてい

るのではないかという心配もするが、同時に「……誰だつて、ほんたうにいいことをしたら、いちばん幸なんだねえ。だから、おつかさんは、ぼくをゆるして下さると思ふ」と自分が人のために犠牲になつたことを喜び、お母さんが自分のしたことを許してくれるだけではなく、褒めてくれるだらう、と楽観的に考えてもいる。彼にとつて、自分の命より大事なものは人の幸せだつた。友人のジョバンニも同じように考えている。「……僕はもうあのさそりのやうにほんたうにみんなの幸のためならば僕の中からだ

賢治の菜食主義の観念が一番明確に顕現している作品として、「ビヂテリアン大祭」が挙げられる。この作品は、独特の内容と描写法が客観的に描かれた作品として、注目に値するものであると思われる。仏教、とりわけ法華経の教えに確固たる信念を持ち、みんなの幸せは個人（つまり自分）の幸せであると確信していた信心深い賢治には、近代科学の可能性を客観的に把握して分析し評価する優れた科学者の才能もあった。賢治の心に宿っていたこの「信心深い信者」と「抜群の科学者」の面影が——その二重性が——この作品を貫いていて、「賢治の生命観、人生観、宗教観を知る重要な手掛かりになる作品」であることはいうまでもない。

彼は、宇宙のすべての現象が彼の好奇心に訴え、類のない、独特な人生観と世界観を生み出すまでにいたったが、宗教と科学をどこかで結びつけて一体化させ、人類をはじめ地球上のすべての生き物に幸せをもたらそうと努めたのである。「ビヂテリアン大祭」を書く目的もおそらくそれであつたろう。賢治は、菜食の利点と肉食のもたらす害悪について十分な知識を持っていたに違いない。「ビヂテリアン大祭」と「一九三一年度極東ビヂテリアン大会見聞録」（以降「大会見聞録」）の二作品の内容や構造からもこれがわかる。

「ビヂテリアン大祭」の中では、菜食の賛成派と反対派が交代にそれぞれ自説を主張し、討論が展開されて行き、終わりごろになると、

今まで肉食主義を強調してきた反対派の全員が、突然態度を引っくり返して菜食主義者になる決心を示すところで話が終わる。「賢治が vegetarianism についてかなりの知識と深い関心を持ち、周到な用意のもとにこの作品のペンをとり、菜食主義とその反対論の種々相を整理して登場人物に語らせ、その中で、慈悲の精神から発した殺畜生戒に基礎を置く仏教的菜食主義の正当性を訴えようとしたのではないかと考えることが出来る」と上田哲が指摘している。もちろん、肉食をかばう討論者たちは、次々に科学的に根拠のある論理を持ち出して菜食主義者の信念を打ち砕こうとしているが、その裏には「科学者賢治」の面影が明らかに見える。しかし、同時に、確固たる信仰心の持ち主でもあつた賢治は、大自然の一員である人間は自然との一体化をはかるべき義務を課せられていると論じ、「菜食はみんなの心を平和にし互に正しく愛し合ふことができるので」と、みんなに平和と幸せをもたらすものは「菜食主義」だけだとビヂテリアンの同盟者に言わせて、仏教的菜食主義を肯定しているのである。

賢治は「ビヂテリアン大祭」の中で、菜食を厳密に守る菜食主義者を「菜食信者」と呼び、その精神として、理論的に「同情派」と「予防派」の二つに分けている。また、「大会見聞録」の中でも、テーズとして全く同じ分類の方法を採用している。「同情派」の菜食主義者の考えでは、地球上のすべての動物は、人間もそれに含まれるが、

を鼓舞したのが、ピタゴラスであり、トルストイであり……」⁽²⁰⁾と主張している。ピタゴラスやトルストイの影響はあったとしても、「命を惜しむ」生き物を哀れむ賢治のこの決心の裏には、人類すべての幸福への念願が含まれている一方、「輪廻転生」のインド・仏教的思想が根深く顕現しているに違いない。

作品の中で、「印度の聖者たちは実際故なく草を刈り花をふむことも戒めました」「印度の聖者たちは濾さない水は呑みません」「今日のピヂテリアンは実に印度の古の聖者たちよりも食物のある点に就て厳格である」と、三箇所⁽²¹⁾でインドに関する発言がある。

言うまでもなく、インドは東洋におけるさまざまな宗教、哲学、思想の発祥地で、古代から菜食主義の食生活が広がった国の一つである。アヒンサー（不殺生）、非暴力などという宗教に基づいた概念が、その主な理由となったと思う。生き物・動物は「生命を惜しむ」という考え方、つまり不殺生は、仏教より数百年前に生まれたジャイナ教が「五大誓戒」の中で一番重要な項目として持ち出した概念で、生きとし生けるものはすべて生きること必死に願っている⁽²²⁾ので、どの生き物でも勝手に殺されることは望んでいないと強調した。ヴェーダ時代の古代インドでは、動物犠牲を捧げて神々を喜ばせることは日常茶飯のような出来事であった。一度神に供えられた動物の肉は、司祭たち間で分けて食べられていた。つまり、ヴェーダ時代までのインド人が肉食をよくしていたということは、紛

れもない真実である。古代ヒンドゥー教の社会体制を確立させるのに大きな役割を果たした『マヌ法典』の中にも、可食・不可食の野菜、肉、魚、飲み物などの名前が列記されている。たとえば、にく、にら、玉葱、茸などの野菜、猛獣類、鶏、雀、鶴等の鳥肉、すべての魚類などは禁じられている食べ物の中に入る⁽²³⁾。言い換えれば、マヌ法典に記されていない動物や、鳥類の肉を古代インド人は食べていたということになる。宗教的な儀礼や結婚式などでも肉食が許されていたそう⁽²⁴⁾で、上位カーストのバラモンも美味しい肉料理を競って食べていたに違いない。

この退廃的な古代インド社会の儀式や風習への反発として「不殺生」の観念を抱えてジャイナ教が現れ、神々に動物を生贄として捧げることを厳しく批判した。また、ジャイナ教は、この世界に無限の靈魂が生まれては消えていくが、「靈魂が輪廻転生を繰り返す根柢には行為とその結果靈魂に付着する業とがある。その行為を究め捨てる⁽²⁵⁾ことが生死の輪から脱出する手段となる」と教え、身、口及び意による殺生を食い止める必要性を説いた。ジャイナ教によると、すべての靈魂を、地、水、火、風の各元素に植物と動物と、六生類に分類することが出来る。人間のどんな行為でも、この六生類の靈魂を何らかの形で殺したり、傷つけたりすることになる。それで人間には、殺生の罪から逃れる逃げ道はないのである。つまり、ジャイナ教では、人間は常に生き物を殺している⁽²⁶⁾ので、殺生を食い止め

て、人々への入信の増加を期す。その結果、教会の活動は、従来の宗教活動から、社会生活全般にわたるものへと拡大していった。この拡大は、教会の社会生活への関与を促進し、教会の社会生活への関与を促進した。この結果、教会の社会生活への関与は、従来の宗教活動から、社会生活全般にわたるものへと拡大していった。

この拡大は、教会の社会生活への関与を促進し、教会の社会生活への関与を促進した。この結果、教会の社会生活への関与は、従来の宗教活動から、社会生活全般にわたるものへと拡大していった。この結果、教会の社会生活への関与は、従来の宗教活動から、社会生活全般にわたるものへと拡大していった。

この結果、教会の社会生活への関与は、従来の宗教活動から、社会生活全般にわたるものへと拡大していった。この結果、教会の社会生活への関与は、従来の宗教活動から、社会生活全般にわたるものへと拡大していった。

この結果、教会の社会生活への関与は、従来の宗教活動から、社会生活全般にわたるものへと拡大していった。この結果、教会の社会生活への関与は、従来の宗教活動から、社会生活全般にわたるものへと拡大していった。

げられる。ウェーダ時代以降になると、職業に基づく「カースト制度」が成立し、最上位のカーストに当たる聖職者つまり「バラモン」の間では動物の肉とか血液は「魂」の宿る体を汚すものとして見られ始め、次第にほかの上位カーストの間にもこの考えが染み込んで定着するようになった。ヒンドゥー教のこの不浄観は、すべての物質を不浄とみなし、動物の肉と血を忌み嫌う結果となった。つまり、ヒンドゥー教にとって、「食事は一種の儀礼とみなされ、食事の場と食物は常に清浄でなければならぬ」という穢れの概念が定着し、彼らの菜食主義への変遷を実現させたのであるといえる。それに、数多くの動物たちが、神々の乗り物として崇められたり、神聖な力を持つ生き物として崇拜されたりするようになった。たとえば、牛、蛇、ねずみ、孔雀、象、猿などは聖なる生き物で、猿や蛇が祀られている寺や礼拝堂もたくさん造られた。

第三の主な理由として取り上げられることは、上述のジャイナ教や仏教と同じく、ヒンドゥー教にも見られるアヒンサーの思想の実践である。生き物は皆命を惜しむもので、人間が勝手にそれを殺して食することは無慈悲なことである。肉を食する人間は魂（アーマン）の居所である自分自身の体を穢す傍ら、生き物に対する同情や哀れみを持たない無残な人間になってしまう。

およそ二〇〇〇年前に書かれたタミール語の有名な文学作品「テイルクラル」(Thirukural)でも、「自分の肉体を太らせるために他

の肉を食べる者はどうやって同情（哀れみ）を持てるのだろうか（詩句二五二）。凶器を持つ者は慈悲を持てるか、肉を食うものの心に哀れみ（同情）はきつと生じないだろう（詩句二五三）。情感を捨てた、知覚力のある人は動物の肉を食い物にしない（詩句二五八）」と肉を非難している。このことからこの考え方の奥行きがわかるだろう。このようにして、多くのインド人の食卓から肉が消え、現在でもおよそ四割のインド人は純粋な菜食主義者である。

しかし、ここで特記すべきことは二つある。まず、牛乳及びヨーグルト、バターなどの乳製品は、動物質であるにもかかわらず古代から聖なる健康食としてインド人に愛用されてきたことだ。菜食者、肉食者を問わずインド人なら誰でもこれらの乳製品を日常的に消費している。もう一つのポイントはヒンドゥー教の教義や世界観における大きな矛盾の一つである。ヒンドゥー教は多神教で、宗派も数え切れないほど多くあり、中には原始的、シャーマンのものも含まれている。殺生を罪とみなしている一方、神や女神を喜ばせるために生き物を生贄として捧げる宗派もあるので、ヒンドゥー教ならすべての信者が菜食者だとか生き物を殺さないものだとか思い込んでは大きな勘違いとなる。

上述のとおり、菜食が宗教的生活の根拠となっているインド人の「菜食主義」の思想は、健康食として菜食を優先する一部の欧米人の菜食主義の考え方と全く違うもので、賢治もそれに十分に気づい

には草食動物にしか見られない白菌と肉食動物に見られる犬歯がある。人間は混食をするべき動物であると、混食主義者がさらに主張し続けている。地質学者で農民の惨めな生活ぶりを見ていた賢治の中に眠っていた科学者がここで顔を出しているのは一目瞭然である。

しかし、肉食ははたして人類が立ち向かっているすべての問題の解決になるのか。東洋的神秘主義に基づいた宗教観を持っていた賢治はそれを懐疑的に見ていたに違いない。大正一〇年八月一日に賢治が関徳弥宛に送った手紙に、「七月の始め頃から二十五日頃にかけて一寸肉食をしたのです。それは第一は私の感情があまり冬のやうな工合になってしまつて燃えるやうな生理的の衝動なんか感じないやうに思はれたので、こんな事では一人の心をも理解し兼ねると思つて断然幾片かの豚の脂、塩鱈の干物などを食べた為にそれとさつきかけにして脚が悪くなつたのでした。然るに肉食をしたつて別段感情が変るでもありません」と書いてあるが、ここには肉食に対する彼の批判が明白に表されている。肉食は一時的に人間の体力を増やし、体をたくましくする働きをしてくれるかもしれないが、次第に体調を崩し恐ろしい病を得る原因にもなるのだという事は、信心深い仏教信者で、一科学者でもあつた賢治は、十分理解していたやうだ。それゆえに、「一日ニ玄米四合ト／味噌ト少シノ野菜ヲタベ」と「雨ニモマケズ」の中に書いてあるやうに、菜食に完全に切り替える

ことを決心して農民生活を選んだのだろう。

肉食は人間の動物的な本能を高め、暴力を振るうやうなものにさせると、インド人は昔から信じてきた。そして、前述のいくつかの理由とともに、これもインド人が肉食から離れる一つの主な理由となつた。今も、この世の物質的な生活に飽きて、苦行者としての「林住期」「出家期（巡礼期）」または「隠居生活」に入るインド人がまざることは、肉食を完全に止めることだ。逆にいえば、菜食は人間の心を優しくし、他の生き物に対して同情と慈悲を持つ心を作り上げ、平和的な共存共栄を可能とすると信じてきたのである。

菜食のもたらす「幸福」はどんなものであるかを十分理解していた「宗教的求道者」賢治は、肉食の利点や大切さについて議論している。「科学の追求者」賢治に、「……肉食を食べるときその動物の苦痛を考へるならば到底美味しくはなくなるのであります」と反論し、野菜がみんなの心を平和にして、互いに愛し合うことしてくれるのだと強調してから、仏教の「輪廻転生」の概念を持ち出して、肉食者の議論にとどめを刺そうとしている。

「総ての生物はみな無量の劫まがひの昔から流転に流転を重ねて来た。（中略）一つのたましひはある時は人を感じる。ある時は畜生、即ち我等が呼ぶ所の動物中に生れる。ある時は天上にも生れる。その間にはいろいろの他のたましひと近づいたり離れたりする。即ち友人や恋人や兄弟や親子やである。それらが互にはなれ又生を隔てて

注

- (1) 原子朗「インドの賢治」『東京新聞』(夕刊)二〇〇六年三月三一日付。
- (2) 『(新)校本宮澤賢治全集』第十五巻 筑摩書房 一九九五年 二一六〜二七頁(書簡一九五)。
- (3) 同書、同巻 二二二〜二二三頁(書簡二二二)。
- (4) マロリ・フロム『宮沢賢治の理想』(川端康雄訳) 晶文社 一九八四年 一四頁。
- (5) 賢治が小学校五年生のときの担任の先生照井真臣乳はクリスマスヤンで、内村鑑三の弟子であった斎藤宗次郎と交流していたようである。
- (6) 山折哲雄は「デクノボーになりたい 私の宮沢賢治」(小学館二〇〇五年)の中に賢治のキリスト教世界との接触はどんなものであったのかを詳しく説いている。
- (7) 山折哲雄「デクノボーになりたい 私の宮沢賢治」小学館 二〇〇五年 五頁。
- (8) 『新潮日本文学アルバム二二 宮沢賢治』新潮社 一九八四年 七頁。
- (9) 同書 八頁。
- (10) 『校本宮澤賢治全集』第十四巻 筑摩書房 一九七七年 一一七二頁。また、堀尾青史は自著「年譜 宮澤賢治伝」(図書新聞社一九六六年)の中で、賢治が後年八木先生に会ったときに「私の童話や童謡の思想の根幹は、尋常科の三年と四年ごろにできたものです。その時分先生(八木)が「太一」のお話や、「海に塩のあるわ

け」などいろいろのお話をしてくださったじゃありませんか。そのとき私はただ蕩然として夢の世界に遊んでいました。いま書くのもみんなその夢の世界を再現しているだけです」と語ったと述べている(一六頁)。

- (11) 見田宗介「修羅」三木卓・他「群像日本の作家 一二 宮澤賢治」小学館 一九九〇年 二四頁。「立志」という題名の作文を書かせた八木英三先生は、賢治の没後の思い出話の中で「賢治君も同様に家業をついで商売にいそしむ趣が、やつぱり二三行にかけてあった」と語っている。「校本宮澤賢治全集」第十四巻 一一七一頁を参照。

- (12) マロリ・フロム 前掲書 二二三頁。
- (13) 『校本宮澤賢治全集』第十四巻 筑摩書房 一九七七年 四一三頁。
- (14) 前掲書「新潮日本文学アルバム二二 宮沢賢治」 六頁。
- (15) 山折哲雄 前掲書 三八〜三九頁。
- (16) 前掲書「新潮日本文学アルバム二二 宮沢賢治」 一五頁。
- (17) 松濤誠廉・他訳「大乘仏典四 法華経I」第七章 過去の因縁(化城喻品) 中央公論社 一九七五年 二二二頁。
- (18) 松濤誠廉・他訳「大乘仏典五 法華経II」第二十二章 薬王菩薩(薬王菩薩本事品) 中央公論社 一九七六年 二〇〇〜二〇二頁。
- (19) 原子朗「宮沢賢治とはだれか」 早稲田大学出版部 一九九九年 六七頁。
- (20) マロリ・フロム 前掲書 三二頁。
- (21) 前掲書「(新)校本宮澤賢治全集」第十五巻 五九頁(書簡五

- 展開「インド思想1」(岩波講座第五卷・東洋思想) 岩波書店 一九八八年、を参照のこと。
- (53) 可・不可食の詳細は、渡瀬信之著の「マヌ法典 ヒンドゥー教世界の原型」(中央公論社 一九九〇年 一二三〜一二四頁)及び田辺繁子訳「マヌの法典」(岩波書店 一九五三年 一四五〜一四六頁)を参照のこと。
- (54) 谷川泰教「原始ジャイナ教」「インド思想1」(岩波講座第五卷・東洋思想) 岩波書店 一九八八年 七四頁。
- (55) 松濤誠廉・他訳「大乘仏典五 法華経II」第十三章 安楽な生き方(安楽行品) 中央公論社 一九七六年 六三頁。
- (56) 同書 第二十六章 まったく吉祥なるという菩薩(普賢菩薩勸発品) 二五四頁。
- (57) 森本達雄「ヒンドゥー教―インドの聖と俗」中央公論新社 二〇〇三年 二六一頁。
- (58) テイルヴァルヴァル(Thiruvalluvar)『ティルクラル』Thirukural 二六章「肉食について」(これらの詩句の日本語訳は、筆者がV. V. Abdulla Sahibのマラヤラム語訳を基に翻訳したものである)。
- (59) 前掲書「〈新〉校本宮澤賢治全集」第十五巻 二一八頁(書簡一九七)。
- (60) 宮澤賢治「雨ニモマケズ手帳」『〈新〉校本宮澤賢治全集』第十巻(上) 筑摩書房 一九九七年 五二二〜五二五頁。
- (61) インド人(ヒンドゥー教徒)は人間の一生を「学生期」「家住期」「林住期」及び「出家期(巡礼期)」と、それぞれ違う役割を果

たさなければならぬ四つの時期に分けて考えている。それを「家住期」(チャトゥラシラム)と呼ぶ。「学生期」では、ヴェーダなどの学問を行い、知識を蓄え、次の時期の人生を送るための準備をする。そして、成人になると結婚して、子供を作り家族を養う「家住期」に入る。妻子の扶養を一所懸命にやって、子供が自立して人生を送れることを確保してから、「林住期」に入り、苦行やヨガで身体と心を鍛える。それから、人生の最終目的である「モクッシャ」(輪廻転生からの解放)を目指して、「巡礼期(出家期)」に入るのである。非常に理想的な分け方であるが、実生活ではなかなか実行しにくい。それでも、今もこれを厳守しているインド人もいないわけではない。

- (62) 前掲書「〈新〉校本宮澤賢治全集」第九巻 二二四頁。
- (63) 同書 二四一〜二四二頁。
- (64) 宮沢賢治の童話作品の一つ。「貝の火」は前掲書「〈新〉校本宮澤賢治全集」第八巻に載っている。
- (65) 梅原猛「宮澤賢治と風刺精神」三木卓・他「群像日本の作家 一一 宮澤賢治」小学館 一九九〇年 三二頁と三三頁。